



2026
No.
141

contents

特集	特集展示「源氏物語と大津」・企画展「紫式部と祈りの世界」を通じて P1～P3
収蔵品紹介	明治時代初期に作成された 地籍図(北浜区財産管理会蔵) P4～P5
コラム	土地の歴史を伝える P6 地名由来碑



大津市歴史博物館

令和8年3月5日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

特集

特集展示「源氏物語と大津」・企画展「紫式部と祈りの世界」を通じて 2024年大河ドラマ「光る君へ」の取り組みを振り返る



1. 会期
令和6年(2024)1/10(水)～令和7年2/2(日)
2. 会場
大津市歴史博物館 常設展示室・ロビー
3. 主催／大津市歴史博物館
4. 特別協力／大本山石山寺
5. 観覧料／常設展示観覧料
6. 展示作品／106件
(うち重要文化財1件、大津市指定文化財1件)
7. 入館者数／42,150人
(うち有料観覧者36,309人、無料観覧者5,841人)
8. 講座・イベント参加人数合計／558人

図1 特集展示「源氏物語と大津」



1. 会期
令和6年(2024)4/27(土)～5/19(日)
2. 会場
大津市歴史博物館 企画展示室B
3. 主催／大津市歴史博物館
4. 観覧料／常設展示観覧料
5. 展示作品／17件
(うち国宝3件、重要文化財6件、大津市指定文化財1件)
6. 入館者数／4,441人
(うち有料観覧者3,877人、無料観覧者564人)
7. 講座参加人数合計／282人

図2 企画展「紫式部と祈りの世界」

年明け早々の1月4日から、いよいよ2026年大河ドラマ「豊臣兄弟!」が始まりました。それに関連して、当館では今夏に豊臣秀吉と大津に関する企画展の準備を進めていますので、こちらにも楽しみにお待ちください。

さて、当館では2024年大河ドラマ「光る君へ」の放映に合わせて、約1年もの間、関連する展示を行いました。準備期間を入れると足掛け4年にも渡る長期間の事業で、のべ42,000人余りの方々にお越しいただきました。そこで今回は、回想録を含め結果報告をさせていただきます。

大河ドラマ関連展示の始まり

2022年の5月に大河ドラマ「光る君へ」が放映されることが決まり、大津市では石山寺を中心に大河ドラマ関連の事業を行うこととなりました。石山寺山内の明王院が大河ドラマ館となり、関連スポットとして三井寺(園城寺)や当館が設定され、観光客の周遊を図りました。

当館では、大河ドラマの開始に合わせて、2024年1月10日から、大河ドラマ終了後の余韻を含めた2025年2月2日までの1年強を会期とし、特集展示「源氏物語と大津」を開催することとなりました(図1)。

何度も来館してもらえる展示をめざして



図3 1階ロビー風景

当館の常設展示室およびロビーを会場とし(図3)、紫式部が『源氏物語』を執筆したと伝わる石山寺に所蔵される美術作品を中心に、『源氏物語』と大津の関わりについて紹介しました。常設展示室の半分を改修し、会期を全6期に分け、各期でそれぞれ展示替えを行い、合計106件(うち重要文化財1件、大津市指定文化財1件)を展示しました。なお、常設展示室1階のシアターでは、「源氏物語と大津」と題した8分程度の映像を放映しました。

ロビー(無料スペース)では、長大な物語である『源氏物語』を分かりやすく、かつイメージとして親しんでいただくため、全54帖のあらすじ、人物相関図、その場面を描いた



図4 『源氏物語』デジタル絵巻



図5 四季の間



図6 源氏之間



図7 平安文化解説パネル

絵巻をタッチパネルで学ぶことができる『源氏物語』デジタル絵巻」を設置しました(図4)。

また、楽しく『源氏物語』を体験してもらうため、モーションセンサーと連動して『源氏物語』の世界をイメージで体感できる「四季之間」という体験型インタラクティブコンテンツを、100インチモニターを活用して運用しました(図5)。これは実際に『源氏物語』を描いた絵画作品をもとに、地面に映し出された絵のモチーフを踏むことで、正面スクリーンにその絵が完成し、その場面を表す和歌のナレーションが訳とともに流れるというものです。

さらに、石山寺本堂にある、紫式部が『源氏物語』を書き始めた場所として伝わる「源氏之間」を原寸大で再現し、来館者が実際に中に入って記念撮影ができる「源氏之間」フォトスポットを設置しました(図6)。合わせて、スマートフォン用の自撮り台を置き、自由に撮影していただけるようにしました。

加えて、大津市内で歌枕として読まれる地名や景物を専用パネルで学ぶ「大津の歌枕」や、平安時代の文化を紹介するパネルも展示しました(図7)。

様々な方に楽しんでもらうために

関連イベントとして、『源氏物語』が専門の同志社大学教授の岩坪健氏に記念講演会「源氏物語と大津」(2回)をしていただきました。また、源氏絵が専門の和泉市久保惣記念美術館館長の河田昌之氏に「板谷派の源氏絵制作に見る創意」、大河ドラマ関連展示を行っていた京都府にある宇治市源氏物語ミュージアム館長の家塚智子氏に「源氏物語聖地巡礼—大津・京・宇治—」とそれぞれ題して、れきはく講座でお話いただきました。

また、大津市出身の講談師である旭堂南風氏に、「紫式部と月と源氏物語」・「源氏供養 紫の想い」と題した

講談をしていただき、合わせて当館学芸員によるギャラリートークを行いました。

さらに、実際に『源氏物語』で詠まれる和歌を、彦根在住の書家である田中貴光氏の指導の下、紫式部所用と伝わる硯のレプリカを用いて書く体験講座「源氏物語の和歌を書く」というイベントも開催しました。

足を運んでもらうきっかけ作り



図8 スタンプラリー

その他のイベントとして、観光客誘致のため、石山寺豊浄殿、三井寺文化財収蔵庫、当館の3拠点を巡るスタンプラリーを開催し、3か所全て回った方には景品をプレゼントしました(図8)。また、「X(旧 Twitter)」でハッシュタグキャンペーンを行い、フォローした方にオリジナルステッカーを配付しました。

さらに、びわ湖大津観光協会の主催として、「紫式部・平安貴族なりきり体験」を開催しました。これは会期中の土日祝限定で、衣裳生島からお借りした平安貴族女性の衣装による着付け体験を行うもので、「源氏之間」フォトスポットで記念撮影もしていただきました(図6)。さらに、「源氏之間」フォトスポットに隣接して、自由に和歌を書けるスペースを設置しました。観覧者の方に『源氏物語』に登場する和歌などを自由に書いてもらい、その和歌を壁に貼っていただくというものです。これは「源氏供養」という平安時代から行われていた紫式部を供養する儀礼を参考にしたものです。

充実したグッズラインナップ



図9 オリジナルグッズ一覧 ファイル：2種、ふせん、マスキングテープ、缶バッジ：7種、ストラップ：5種、マグネット・ミラー：各7種)を制作しました。また、当館オリジナル缶バッジ(全28種)をカプセルトイとして販売しました(図9)。

今回の展示を紹介したパンフレット(A5オールカラー、50頁)の他、オリジナルグッズ全7種(トートバッグエコバッグ、ぷちたおる、スリムサーモボトル：青・ピンク、A5クリア

さらに、本展示のオリジナルキャラクターを使用した、スマホアプリ「LINE」で使用できるスタンプ「紫式部ちゃんとなかまたち」をびわ湖大津観光協会より配信しました。

企画展「紫式部と祈りの世界」

常設展示室内の特集展示「源氏物語と大津」と並行して、大河ドラマ関連展示の2年度目事業として、企画展「紫式部と祈りの世界」を開催しました(図2)。企画展示室の使用の都合から、会期は20日間とごく短い期間となりましたが、『源氏物語』の執筆に深く関わる紫式部、藤原道長、彰子の3人に焦点を当て、それぞれにまつわる仏教美術を展示するというものでした。

点数は少な目ながら超一級品だらけ

展示では紫式部が生きた平安時代中期から後期の文化を、仏教という視点から紹介しました。石山寺に所蔵される紫式部の最古の肖像画である「紫式部聖像」に加えて、藤原道長が作らせ、奈良の金峯山上に埋納した経筒(国宝)、そこに納めるために書いた経典(国宝)、そして道長の娘の彰子が作らせ、比叡山延暦寺横川に奉納した経箱(国宝)を中心に展示を構成しました。『源氏物語』が執筆された平安時代の中期から後期へと移行する時代は、末法思想の高まりとともに、仏教へ傾倒していく時代でもありました。そこで、『源氏物語』の執筆に関わる紫式部、藤原道長、彰子にまつわる遺品を中心に、当時の仏教文化を紹介しようとしたものです。また、同時代の関連する仏教美術として、堅田・浮御堂の秘仏である聖観音像や西教寺の聖観音像、乗念寺の聖観音像の他、比叡山延暦寺の法華経(いずれも重要文化財)など展示品の半分以上が国宝・重要文化財というものでした。

なお、本展示では展示図録を制作できなかったことから、代わりとして各テーマに合わせた解説パネルを各所に設置し、観覧者の方の理解の一助としました。また、観覧者より解説パネルの資料が欲しいというご要望が大変多かったため、会期中から当館ホームページにて解説パネルを全文掲載しました。

各分野の第一人者による最新の研究内容

企画展に関連するれきはく講座は計3回開催しました。日本中世絵画が専門の早稲田大学文学部教授山本聡美氏に「祈りと救済の絵画 ―平安時代の女性と仏教―」、2007年の特別展覧会「藤原道長―極めた栄華・願った

浄土―」を担当された京都国立博物館特任研究員宮川禎一氏に「藤原氏の栄華 ―道長の経筒・彰子の経箱―」、仏教における戒律や女性が専門の京都大学白眉センター特任准教授大谷由香氏に「日本仏教の中の女性たち ―比丘尼戒壇をめぐる―」と題して、最新の研究成果を盛り込んでお話しいただきました。

大河ドラマ関連展示を終えて

以上、駆け足ですが、2024年大河ドラマ「光る君へ」に関連した当館の取り組みを振り返ってみました。

今回の展示は、『源氏物語』がテーマでしたが、長大で難解な物語であるため、一般の観覧者の方々にどのように興味を持っていただくかに最も注力しました。そこでメインビジュアルは人の目に留まりやすいデザインを重視し、より親しみを感じてもらおうとオリジナルキャラクターも制作しました。また、展示造作についても、ロビーだけでなく、展示室内にも造作を持ち込むことで、物語のイメージに入り込んで作品を鑑賞できるよう工夫しました。さらに、「紫式部」という名前から、作品を置く展示台はすべて紫色にしました。最初は不安もありましたが、実際に作品を置いてみると観賞を邪魔せず、想像以上に上品な仕上がりととなりました。

当館において、大河ドラマに関連した展示は過去にも行ってきたものの、今回のような大掛かりな取り組みは初めてのことでした。特に今回は資料の展示だけでなく、様々なコンテンツやイベントを組み合わせながら1年間の展示を行うという、非常に困難なミッションでした。それでも、大きな事故もなく、無事に展示を終えることができ、担当した身



図10 展示終了直後の担当者(撮影:受付係)

としてはやり切ったという感慨でいっぱいでした(図10)。

本展示に際しましては、石山寺座主鷲尾龍華貌下はもちろんのこと、石山寺で文化財を担当されている田中水萌様には、調査から出陳作品の調整まで、お忙しいところほぼ付きっきりでご対応いただき、感謝の念に堪えません。また、本館受付係の増田友香さんのデザインがなければそもそも本展示は成り立ちませんでした。上記の3氏と共に、本展示にご助力いただきました全ての皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

(学芸員 鯨井清隆)

明治時代初期に作成された地籍図（北浜区財産管理会蔵）

古地図などに記された情報は、過去の土地の使われ方や地域内の構造物の立地を確かめるための手がかりのひとつとなります。明治時代初期には、政府の主導による地租改正事業や地籍編成事業において、全国各地で土地の面積・地目・所有者などを把握するための地籍図が作成されました。大きく分けて4回にわたり雛型や記載項目の異なる地籍図が作成され、後から補訂が行われたものもあることから、同じ場所で同時期に作成された地籍図でも読み取ることのできる情報が異なることもあります。

複数の地籍図を比べる

当館には、明治時代初期に作成された和邇北浜の地籍図類が複数点寄託されており、作成年による情報の相違や変化を知ることができます。たとえば作成年が記された地籍図として明治6年(1873)、明治9年、明治11年に作成されたものが挙げられます。これらには共通して地番や小字の境界などの情報が記載されている一方で、よく見ると凡例の項目や田畑の等級の表現方法などが異なり、政府の通達に応じて複数回にわたり地籍図が作成・補訂されたことがわかります。このほかには、周辺の村との入会地(複数の村が共同で資源採取などを行う場所)の場所を描いたものもあります。そこには、入会権を共有する村ごとの所有領域が描き分けられていたり、その一部が購入されていずれかの村に統合されたことが奥書に記されていたりすることもあり、その領有をめぐる変遷をたどることができます。



大きさや内容の異なる複数の地籍図類

写実的な表現から読み取れること

ところで地図というと、手で持って眺めるようなコンパクトなサイズの紙面を想像される方も多いでしょう。ところがこの頃作成された地籍図のなかには、それよりはるかに大きなものが含まれます。寄託された北浜の地籍図のなかで最大のもは約4.6m×約2.8mに及び、折り畳まれたものを数人で協力して広げる必要があるほどの大きさです。そしてそれほど大きな地籍図のなかに、目を凝らして見なければ見落としてしまうほど細かな情報が記されていることがあるのが、現物の地籍図を見るとききの面白さのひとつです。たとえば先ほど挙げた明治6年作成の地籍図では、異なる色を塗り分けることで地目が表現されていますが、よく見ると住吉神社の境内地の範囲だけ、マツのような木の樹林の様子が写実的に描かれています。また水系をたどると、橋や堰せきなどがリアルに描かれている箇所も複数みられます。政府や県からの要請では必ずしも記載が求められていないにもかかわらず、あえて細かな描写によって表現された背景には、地域のなかで重要な役割を担っていた可能性が考えられます。

また、入会地やその周辺を描いた地籍図には、目印のためか境界に非常に小さく岩や鳥居などが描きこまれている場所がみられます。そのなかのひとつに、「岩神社」と文字で記された場所がありました。気になって地元の方に話を聞いてみると、それは北浜ではなく隣の栗原のものだというのです。なぜ北浜の絵図に栗原の神社が描かれているのだろうと不思議に思い、地元の方に現地を案内していただきながら話を聞くことにしました。行ってみると、この岩神社の南側を栗原と北浜の境に沿うように水路が流れていることがわかりました。



住吉神社周辺に描かれた樹林



鳥居によって表現された岩神社

資料で確かめると、両集落の間には長年この水の利用をめぐる争いがあり、最終的には栗原が水利権の優位を得たようです。北浜に祀られた栗原の岩神社は、この水路を守る存在のように感じられます。地図に描かれた神社からは、このような自然資源の利用をめぐる集落同士のせめぎ合いの歴史もうかがい知ることができます。

普段、絵図や地籍図を使って調査・研究を行うときは、あらかじめ写真を撮影してデジタル化されたものを参照することも少なくありません。一度デジタル化されれば、描画ソフトを使って必要な箇所のトレースを作成したり、複数の絵図を重ね合わせて比べることが容易になり非常に便利です。しかし現物の地図を丁寧に見ると、細かく書き込まれた文字や記号、裏面に書かれた注釈、紙を重ねて上書きされた痕跡など、画面上では見落とされていた情報が多くあることに気付かされます。史料のデジタル化が進むなかで、現物を確かめることの重要性を改めて感じました。

(京都大学大学院地球環境学舎 小山葉奈*)

※令和7年度同大学院インターンシッププログラム「大津市比良山麓における生物文化多様性に関わる研修」(大津市歴史博物館・同都市計画課受入れ)参加学生



岩神社



岩神社の南側を流れる水路



「近江国滋賀郡第拾五区北浜村地引全図(明治11年)」 全長約 4.6m × 約 2.8m

土地の歴史を伝える 地名由来碑

皆さんは、大津市内で、地名の意味やいわれを説く高さ120cmくらいの碑を目にしたことがありますか。これは大津市が設置している地名由来碑というものです。市内のおよそ60箇所に設置されており、繊維強化プラスチック (FRP) 製、木製、石製の3種があります。



地名由来碑 (左から観音寺、仰木、真野)

地名はその土地で起きたできごとや特異な地形、風物、人物や生業などに基づいているものが多く、歴史に触れる最も身近な糸口といってもよいかもしれません。

ここでは地名由来碑が立つ地名の一例として、大津市北西部の湖岸の一角にあたる真野の地名を取り上げてみます。真野の地名由来碑は、真野市民センターの一角に立っています。この地名は美しい野を意味し、琵琶湖に向かって眺望が開けた地形に由来するものと考えられています。由緒はとて古く、平安時代初期に諸氏族の系譜を集成した『新撰姓氏録』^{しんせんしやうじろく}には、志賀郡真野村に住む^{わにべのおみどり}和珥部臣鳥が690年に真野姓を名乗り始めた記録が見え、7世紀には地名として存在したことがわかります。平安時代に編まれた『和名類聚抄』にも、志賀郡の4つの郷のひとつに真野郷が挙げられています。真野郷の範囲は現行の町域より広く、小野や和邇、堅田なども含んでいたようです。この一角は和邇氏や小野氏などの拠点で、曼陀羅山古墳群や真野神田遺跡といった古墳時代の遺跡が集中して残り、古くから人々が集住したことがうかがわれます。また、真野は景勝地として著名でした。かつて真野川の河口に堆積した土砂で形成されていた入江は、源俊頼 (1055～1129) が寂寞とした秋の情景を詠んだ

「鶉なく真野の入江の浜風に尾花なみよる秋の夕ぐれ」という和歌で知られ、『平家物語』や『閑居友』などの文学作品や、能の『竹生島』にも登場します (入江は江戸時代に埋め立てられ現存しません)。地名由来碑では、こうした史料や伝承をわかりやすく解説しています。

大津市内には、真野以外にも、^{はたおり}機織に長けた渡来系氏族の姓に由来する^{にしこおり}錦織、^{けいかいせき}巨大な珩灰石の岩塊にちなむ石山など、千年以上も命脈を保ち、町名として定着している現役の地名がいくつもあります。一方で、地名由来碑は、行政地名としては現在用いられていない旧町名も解説の対象としています。たとえば、幕府の米蔵が立ち並んでいたことにちなむ^{おくら}御蔵町、大津城が膳所に移築された後、三重の堀のうち中堀を埋め立ててできた町であることに由来する^{なかぼり}中堀町など、旧町名の地名由来碑は、大津町の故地に特に多く設置されています。まち歩きをする際は、地名由来碑を東海道最大の宿場町の賑やかな景観を偲ぶ縁としていただければと思います。

なお、地名由来碑の設置が始まったのは、昭和56年 (1981) のことでした。この年には、第36回国民体育大会 (びわこ国体) が大津市を主たる会場として開催され、令和7年 (2025) の「わた SHIGA 輝く国スポ・障スポ」と同様、多くの方が大津市を訪れました。『新修大津市史』の編さん事業が佳境を迎える中、びわこ国体を機に大津を訪れる方々や地域住民に大津市の歴史への理解を深めていただくことをねらいとして、『大津 歴史と文化』という持ち歩きに適したサイズの歴史ガイドブックの刊行と共に、地名由来碑の設置が始められたのです。地名由来碑の設置事業は平成の初めごろまで続き、平成2年 (1990) に開館した歴史博物館が維持管理を引き継ぎました。設置から半世紀近く経過し、時にはやむを得ない事情により移設したり撤去されたりした地名由来碑もありますが、毎年状態を点検し、数本ずつ、説明板の取り換えや塗装などの修理を施しています。今後も大津に住まう方、訪れる方がその土地の歩んだ歴史に興味を持っていただく身近なきっかけとなるように、維持管理に務めていきます。もし、状態が気にかかる地名由来碑を見かけることがあれば、歴史博物館にご一報ください。

(学芸員 森瑞穂)